

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別郵便承認第六二七号
平成二十四年八月一日発行(第四百十五巻第八号)

ホトトギス

八月号



俳句随想 〔三百六十二〕

汀子

「天地有情」への投句について選者の私からのお願いを書かせて頂きたい。先ず、書かれる字は楷書でお願いする。特徴のある字を書かれるのは、ご本人の日頃の習慣から自然なのかも知れないが、読めない時がある。その時は出来るだけ善意に解釈して見るが、どうぞ誰にでも読める字で投句をして頂くようにお願いする。しかし、ご病氣のために、書かれる字が小さくなってしまいう方もある。しかしご自分で一生懸命書かれたのである。そのようなご投句は、選者とし冥利に尽きる有難いご投句であり、私も一生懸命読み取る努力を惜しまない。最終的には選者の添削も加わることもあるが、お許し願いたい。

私が「ホトトギス」の雑詠選を年尾の病のために引き受けたのが昭和五十二年の八月号からであった。その頃は投句の要領として二つ折れの半紙に投句表を貼って楷書、墨筆であった。選句が終わると原稿用紙に清書をして印刷所に送らねばならなかった。その手間だけでも大変な時間にかかることであった。今は投句用紙がある。しかし昔のように黒ではっきり楷書で書いて頂きたい。誠心誠意一句一句を大切に投句して頂きたい。

旬日記 汀子

平成二十三年八月二日 ロイヤル俳壇

一雨に引き寄せし秋ありしかな
人招くハイビスカスの出入口
郷愁の如夏瘦といふことば
運転は初秋の雨を乗り越えて
夏瘦の理由は間は再会す

八月三日 瀧青佳様の追悼恒俳句会

藤袴 文庫に残る名の涼し
蚊に追はれ来たる一人につゞきけり
美しき汗なき別れなりしこと
晩夏の訃偲ぶ心を持ち寄りぬ
百合の香に悲しみ深き会となる

八月七日 下朗句会

快晴の空近づけて夜の秋
朝顔や朝の時間の過ぎ易く
ともかくも大根蒔いてみることに
大会の余韻を引きぬ夜の秋
なつかしみつつ書く弔辞夜の秋

八月九日 大阪倶楽部

散りて知る木樫の咲いてをりしこと
星月夜三瓶の旅路はるけくも
立秋と聞き一雨欲しき日よ
風音が遠廻かいつれとも
又今宵登る階星月夜
咲きそめし花夕べには散る木樫

立秋といふも続きのやうな日々
八月九日 綿業倶楽部
今日も又仕事優先桐一葉
山荘のひぐらし町に届かざる
水音をいつか忘るる夜の秋

八月十一日 清交社

この時季に合はせ詣るも孟蘭盆会
秋めくと思ふに間あることも又
年毎に増え咲き盛る凌霄花
凌霄の咲けば遥かの道しるべ
一人住む時間やりくり秋めきぬ
秋めくとつぶやく夜空仰ぎけり
秋めく日期待の朝とならざりし

八月十三日 ホトトギス社吟行会

この辺と思ふ会場残暑
風落ちてたちまち残暑つものりくる
余裕なき時間やりくり流れ星
羅をまとへば風につかまりぬ

八月十六日 有恒俳句会

雲よ去れベルセウス座の流れ星
この残暑つづくと言ひて構へたる
流星を共に仰ぎし友逝きし
六甲は夫のまほるば星流れ
かなかなの中になかなかな鳴き澄める
残暑とてあなどりがたき二三日

八月十六日 無名会

六甲の稜線浮きて稲光
あなどりてならぬ残暑であることを
稲妻や暮れて家路となりしこと
疎開せし記憶の径赤のまま

稲妻の走るたび雲浮き立つる
寝室のカーテン閉ざす稲光
八月十七日 夏潮句会
日焼など高を括りてをりし悔
これよりの予定に入りくる残暑

流燈の一つは天寿全うす
丈ばかり伸びてゆきけり男郎花
稿債を一つ済ませし盆の月
日焼せし程も仕事のはかどらず
八月十九日 時雨句会
行先の初秋思ひて旅衣
咲き増ゆる木樫の一日終へし花
幾度も地震ふる初秋の大地

初秋の見るみる雨に消ゆる街
初秋の空気豪雨に入れ替はる
一日の気温に对処生身魂
初秋の旅を重ねてをりしこと
八月二十日 東北ホトトギス俳句大会前日句会
新涼の風纏ふ地に来て見舞ふ
秋草のすがれゆく中武家屋敷
幾度も地震ありし地の露けしや

八月二十一日 東北ホトトギス俳句大会

引返す霧の怖さを知つてをり
晴れさうな霧山頂に居据りぬ
八月二十七日 北信越ホトトギス俳句大会前日句会
雲は秋へと移りゆく流れゆく
一雨のありしと聞きぬ露の朝

八月二十八日 北信越ホトトギス俳句大会

風いま吹き渡りけり露の澄
邂逅の名刺交換風の盆

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十三年八月四日 蕉心会

病葉の一枝を離れゆく早さ
又一人増えて箱庭賑はへる
水の色空の深さ秋近し
一度てふ温度差だけで汗涼し

八月五日 「田鶴」五百号記念俳句大会

クラシックホテルの威厳灯涼し
ナイターのことはさておき祝ぎの座へ
天上の青虎地上のむつみ涼し
夕立晴歌劇の街を祝ぎ色に
涼しさを極め主宰の笑顔かな

八月六日 「田鶴」五百号記念祝賀会

八月七日 野分会普屋例会

祝ぎの座の続く故郷星月夜
星月夜四楽章は長過ぎる
落蟬を土産としたる佳人かな
唇の近づいてくる夜の秋

八月七日 遇会

八月八日 朝日カルチャー若草句会

銀漢に倅重ねたるは過去
天の川光年といふ贈物
走馬灯過去を持たざる女かな

八月十一日 土筆会

音頭取父がつとめて五十年
新涼の都市に表情生れけり
鵲の橋青陽子渡り来よ
蓮咲いて池に角度の生れ初むる

八月十三日 ホトトギス社吟行会

御巢鷹に続く露けき空路かな
孟蘭盆といふ大江戸の静寂かな
星月夜太陽系を櫛とし
星月夜船白々と遠ざかる

八月十四日 野分会東京例会

終戦の日を知る物置のラジオ
潮の香と君の香に解く残暑かな
底紅の濃きに集まる羽音かな
花木権ここより男坂となる

八月十六日 草木瓜会

稲城駅降りて都心の残暑解く
ジャズといふ残暑誘ふコードかな
秋暑し土に親しむこと忘れ
生身魂大和に乗つてみたといふ

八月十八日 登高会

宿に着くなり七夕紙渡されて
どちらはんどしたかいなあ生身魂
欲張つて七夕紙を使ひ切る
曇天といふ稲の花盛りかな

稲の花切なさを秘め咲きにけり
八月二十一日 東北ホトトギス俳句会

秋の蟬春雨庵の伽として
新涼と沢庵坂にすれ違ふ
爽やかや山形弁のバスガイド
白粉の花玄関に触れて客
鵲や星降る夜の使者かとも
新涼も土産としたる旅鞆
ミサワイン主の血と化して終戦日
夜這星今夜は君と二人きり
母語る 八月十五日の昼
終戦日今日もボーイングは飛べり
終戦の日に止りたる時動く

八月二十三日 若水句会

八月二十四日 目黒学園句会

八月二十七日 北條トトギス俳句大会

遅れても爽やかに着く列車かな
たをやかにやがて悲しき風の盆
虫の音に包まれてゆく八尾の夜
新涼を纏ひて若き虚子の文字
夕月夜華燭の典を照らすらむ
爽やかに旅を重ねて来し上梓
銀漢に続く最上階の句座
台風の近づく嶺々の騒ぎかな
秋灯の点けば夢二に囲まれて
竹の春覆ひ尽せし記念館

八月三十日 藤浦昭代様句集序句

八月三十一日 夢三空園俳句大会前日句会

PDF = 俳誌のsalon

雑詠

廣太郎 選

秋晴の外角低目へと決める 大阪 薦三郎
 秋の日をころがし三遊間を抜く 同
 ホームラン天の高きを訪ひゆけり 同
 提灯の天地の抜けて万愚節 柏 田丸千種
 陽炎へ消えさうな子を追ひかける 同
 蒜を吊りキャンテイの瓶を吊り 同
 花人に交り学ぶや虚子遺墨 神戸 日下徳一
 あらためて拜す勲章花の雨 同
 春の灯や曾孫に似し虚子坐像 同
 蒲公英やおにぎり食べる場所きまる 我孫子 副島いみ子
 雛の顔夕暮れて来し目鼻立ち 同
 お彼岸や乗換へ多し夫の墓 同
 新句碑を据ゑて寄せけり春の土 京都 安原 葉
 雛の間を訪へば静かに佳人あり 同
 近づくといふ流水に町活気 同
 淡海より京へとのぼり水温む 奈良 古賀しづれ
 臙よりおぼろへ走り京の水 同
 有朋の博文の影莊臙 同

あかときのははむらさきふきのたう 熊本 岩岡中正
 春光といふ耳の端に射せるもの 同
 風雨ほどよき啓蟄の日なりけり 同
 大陸の暖房効かぬ石の床 瑞安 小川龍雄
 大陸の一人の夜や風邪薬 同
 大陸に一人病みたる寒さかな 同
 風かはり雲変はり花咲きにけり 東京 橋本くに彦
 隅田てふ船が船追ふ花見かな 同
 船で着く花見の客も隅田かな 同
 結願の如くに地虫出てをりぬ 福山 竹下陶子
 天帝の瞬かれたる春の雪 同
 紅梅の小紋を樹下に紡ぎたる 同
 吉野行それと定めし花衣 東京 今井千鶴子
 我のみに枝垂れて夜の桜かな 同
 どこやらに花のこぼるる別れかな 同
 明石の門出船入船水温む 神戸 山田佳乃
 若鮎の素早き影を見るばかり 同
 幾度も挑む空あり揚雲雀 同
 日差し来て一山の花軽くなる 榎原 稲岡 長
 山桜満開を期す勢ひあり 同
 花影を天に映したやうな雲 同
 山荘の窓にアルプス春暖燐 東京 大久保白村
 雪形の見えていよいよ春祭 同
 春祭町長選は無投票 同

雑詠句評（七月号より）

保佳・眞理子・葉

とほ歩・憲明・むつみ

中正・千鶴子・静龍

美奇・廣太郎

ありし日のままの書棚にある余寒

神戸

山田佳乃

余寒は春になつて尚寒さを感じる季題であるが、この句は亡き母上であつた弘子さんを偲ぶ句となつていて心に迫るものがある。私も関西の旅に出た折に一度、眺望のよい二階の仕事部屋で御茶を御馳走になつたことがある。三段に積み重ねた書棚、OA機器それらが完備されていた。弘子さんの作品の豊富な語彙はこの書齋から生まれるのだと思つたのであつた。弘子さんの急逝は残念なことであるが、在りし日のままに存在する書棚に余寒を感じたというこの句に心を打たれた。（保佳）

一見御母堂様山田弘子様が生前お使いになられていた書棚であ

らう。勿論現在では作者が「田虹」のお仕事等でお使いになられておられるのだろうが、弘子様が使つておられたそのままの整理の仕方なのだろう。季題から、御命日近い時期が見て取れ、作者のしみじみとした情を感じる。（廣太郎）

早春や君は還らぬ旅に発ち

東京

川口利夫

この句の君とは、作者の女婿、山田雅夫様のことと察せられる。東京に雪の降つた一月の寒い朝、四六歳の若さで急逝。野分会でご一緒させていただいていたが、明るくウイットに富み一句百言での発言は明晰でバランス感覚の良さがうかがえた。若い野分会の希望の星でもあつた。

うら若き奥様とまだ幼いお子様を遺しての永久の旅発ち。ご家族のお悲しみはいかばかりかと思うと胸が痛む。還らぬ旅に発つた君に思いを馳せつつ「早春や」にそのすべてを受けとめた作者の覚悟と前向きに気を引き立てようとする心持ちが、こめられている。哀悼句であると同時に君への鎮魂句ともなっている。（眞理子）

先頃御身内を若くして亡くされた作者である。急逝であらせられた由、四十代と、お若い事も相俟つて、何とも申し上げる言葉も無いが、それを淡々と何の感情も入れずに詠まれておられるところが、又悲しみも一入である。人の死、そして残された者の気持をそれ以上に考えさせられる。（廣太郎）（以下略）

天地有情

江戸選

闇深く花の情の濃かりけり 東京 今井千鶴子
さくら散り今年も一つ年をとる 同
雨に訪ひ別れは花の快晴に 京都 安原 葉
花の散りはじめ近づく別れかな 同
寒声や金春流といふ艶に 東京 稲畑廣太郎
寒声といふ重低音ありにけり 同
久を忌の鞭のごとくに寒波来る 熊本 岩岡中正
春の藁塚母のごとくにありにけり 同
神杉をしづりし雪の天に散る 相模原 木村享史
悴みてゐてもこころに諷詠詩 同
星空と梢の花と光り合ふ 樺原 稲岡 長
空碧きままの星空花の宿 同
国境を越え人悼む声おぼろ 千葉 大木さつき
暫しして悼みひたすら別れ雪 同
妻寝かせ終ひ湯つかふ春浅し 仙台 赤川誓城
海嘯の村一つ消え鐘霞む 同
芝しかと育ちて邸の水温む 吹田 宮崎 正
定まらぬ日和が春を誘へる 同

霞みてはうつつを夢とし給へる 神戸 長山あや
懸命な蝌蚪のいのちの水暗し 同
野にほどく光あつめて春の川 箕面 井上浩一郎
甘樫の雨上りゆく初音かな 同
涅槃図に会ふに覚悟のやうなもの 神戸 後藤比奈夫
心経を書くため四角遍路杖 同
学問の神へと梅の順路かな 大阪 佐十井智津子
幾とせをほほゑみます雛かな 同
きさらぎの雪の一と夜となりしこと 東京 河野美奇
如月の雨しるがねに雑木山 同
対岸に人の暮しや朝霞 龍ヶ崎 今橋真理子
けむりつつ木の芽起しの雨となる 同
神事ある村に人来る燕来る 奈良 古賀しづれ
農の道けふ神の道春祭 同
流水の軋みすなはち海の哭く 東京 山田閨子
日の重さ風の軽さやたんぽぽ野 同
学名も河津桜よ咲きはじむ 熱海 嶋田一步
花を摘み葉を摘み大島桜なる 同

天地有情句評

汀子

前主宰の教訓を忘れない作者。

神杉をしづりし雪の天に散る

相模原

木村享史

背高い神の杉よりの雪しづり。

闇深く花の情の濃かりけり

東京

今井千鶴子

星空と梢の花と光り合ふ

樞原

稲岡 長

闇の桜との存問。

よく晴れた星空の下の花との存問。

雨に訪ひ別れは花の快晴に

京都

安原 葉

国境を越え人悼む声おぼろ

千葉

大木さつき

桜の季節の自然の姿を通して。

遙か外国の知人を悼む声に現れた哀しみ。

寒声や金春流といふ艶に

東京

稲畑廣太郎

妻寝かせ終ひ湯つかふ春浅し

仙台

赤川誓城

謡の世界に惹かれて。

介護の疎かならぬ一日を終えた安堵感。

久を忌の鞭のごとくに寒波来る

熊本

岩岡中正